

内的世界と外的worldの はざまを生きる

“こころ”は、内側だけにあるのだろうか。
——臨床と『夜をめくる星』が照らす「生きるということ」

私たちは長いあいだ、「心は個人の内側にあるもの」と考えてきました。

しかし、虐待やトラウマと向き合い続けてきた臨床心理士・定森恭司さんは、こころは“内側の現象”ではなく、世界や他者との関係の中で生起するものだと語ります。内と外が重なり合う場としての“こころ”。その不一致が人を苦しめ、再び一致していく過程にこそ、回復の道がある——。

その視点は、心理学がしばしば前提としてきた「こころ＝個人の内側」という捉え方に、搖さぶりをかけると同時に、支援や臨床の実践そのものを捉え直すヒントを与えてくれます。

定森さんは、「小説『夜をめくる星』には、“こころ”が描かれている」と語りました。

「こころとは何か」「世界と私の関係はどう成り立っているのか」

『夜をめくる星』の描く“回復と存在の物語”について、臨床の実践・支援の現場・物語の交差点から語ります。（ガイド：千賀則史さん。モダレーター：田原真人さん）

臨床心理士



定森恭司さん

作家



青海エイミーさん

こんな方におすすめ

- ・ “こころ”の新しい捉え方や、思想としての心理領域に関心のある方
- ・ 臨床・支援・ケアの現場において、「理論や技法だけでは語りきれない感覚」を持っている方
- ・ トラウマや生きづらさ、回復のプロセスを、実践と思想の両面から考えてみたい方
- ・ 「生きること」について考えたい方
- ・ 青海エイミーさん作品の読者



千賀則史さん



田原真人さん

1月10日（土）14:00～15:30（13:45開場）

場所 貸し会議室 Palette 久屋大通店

（愛知県名古屋市中区丸の内3-7-9）（久屋大通駅徒歩3分）

参加費：3,000円

アーカイブ動画視聴：3,000円

お申込み〆切 定員に達し次第、または1月9日（金）

QRコードからお申込みできます→

※『夜をめくる星』を未読でもご参加できます

